イギリス滞在記 ⑩
ロンドン大学と世界の考古学

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

ロンドン大学考古学研究所

私が滞在したノリッチからロンドンまでは鉄道で２時間、バスで３時間の道のりだが、ロンドンを訪れるたびに利用させてもらったのが、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）の考古学研究所（Institute of Archaeology）の図書室だった。建物は、大英博物館の北側、ゴードン・スクエアに面した通りに位置している。周辺は、UCL をはじめ、ロンドン大学を構成するカレッジ群の学舎や関連施設が立ち並び、世界中から多くの学生や研究者が集う学びの空間を構成している。天理大学と学術交流協定を結んでいるアジア･アフリカ学院（SOAS）もすぐ近くにあり、中国や日本など、東アジアからの留学生の姿も多い。

UCL の考古学研究所は、イギリスにおける考古学、文化遺産、博物館研究の中心のひとつだが、同時に、幅広い分野を包括し、理論、実践を含め、グローバルに展開する世界考古学の拠点にもなっている。この研究所を創設したのは、20 世紀前半を代表する考古学者のひとり、モーティマー・ウィラー。1934 年のことだった。両大戦に従軍した軍人でもあったウィラーは、イギリスやインドにおける発掘調査の実践を通して、組織的、科学的な発掘調査の方法を体系化したことで知られ、その著書『大地からの考古学』（1954 年）は、邦訳はないものの、団塊の世代以前の考古学者に幅広く読まれ、戦後の日本考古学における発掘調査法にも大きな影響を与えた。

1947 年から 1956 年まで、20 世紀最大の考古学者とも評されるゴードン・チャイルドが研究所の所長を務めた。考古学の研究を通して、ヨーロッパの先史時代を総合化し、ローマ以前の歴史像を文化伝播論の観点からまとめあげたチャイルドの業績は、近代ヨーロッパ考古学の一つの到達点ともいえるものだった。同時に、マルクス主義者でもあったチャイルドは、西アジアにおける文明の発達の歴史を考古学的に明快に描き出し、新石器時代革命論、都市革命論など、人類史における意義を強調した。こうしたチャイルドの方法論や歴史観は、戦前戦後を通じ、著作を通して日本の考古学者に多大な影響を与えたのだった。研究所の図書室の窓際に置かれたチャイルドの胸像は、発掘現場というよりも、むしろ図書室において思索にふけることが多かったであろう寡黙で偉大な考古学者の姿を彷彿とさせる。

ペトリー・エジプト博物館

考古学研究所から少し離れた路地に面した場所にあるペトリー・エジプト博物館は、小さな部屋の古めかしい展示ケースに、エジプト先史時代の土器がぎっしりと収まっている。一般公開されると同時に、エジプトの考古学を志す研究者や学生が思いのままに研究する便宜がはかられていて、展示というよりも陳列されていると表現した方がふさわしいだろうか。この貴重な資料の数々は、チャイルドやウィラーからさらに時代が遡り、19 世紀後半から 20 世紀はじめに活躍した考古学者フリンダーズ・ペトリーが、1913 年、自らがエジプトで発掘して収集したコレクションをロンドン大学に売却したものだ。

幼い頃から考古学に関心を持っていたペトリーは、もともと、ストーン・ヘンジなど、先史時代の巨石文化に関心があり、ギザのピラミッドの正確な測量調査（1880 年）がエジプトにおける考古学的活動の出発点だった。1884 年には、スポンサーの支援を得て、エジプトのタニスにおける本格的な発掘調査を開始し、以後、ほとんど50年間にわたって、エジプト全土に及ぶ 39 カ所余りの遺跡を毎年のように調査した。そして、発掘調査の正確な記録に努め、着実に報告書を刊行した。ペトリーの方法は、のちにウィラーから批判されているが、野外考古学の方法論の基礎を固めるものだったと言えるだろう。

考古学研究所のチャイルド像

ペトリーの業績で特に有名なのは、上エジプトのナカダで、先王朝時代の墓地 200 基以上を発掘し、文献から歴史が知られる王朝時代以前の文化の変遷を明らかにしたことだ。墓地に副葬された土器の集成図を作成し、型式学的な前後関係から全体の相対的な年代を確認する研究方法は、その後の考古学的研究の模範となった。テル・エル・アマルナを発掘して、ミケーネ土器の出土に気づき、エジプト王朝時代との対照によってギリシャの先史時代に暦年代を与えたのもペトリーだった。また、1890 年、シュリーマンによるトロイ発掘に刺激を受けた「パレスチナ調査基金」から委嘱を受け、テル・エル・ヘシの遺跡を発掘して、パレスチナにおける近代考古学の道を開いたのもまたペトリーだった。

1892 年には、UCL に対する支援者の資金援助によってエジプト学教授の職が用意され、ペトリーがその任にあたることになった。ロンドンのペトリー・エジプト博物館では、ペトリーの肖像画のほか、ペトリーに師事した海外からの研究者の一人として、浜田耕作が紹介されている。浜田は、第三高等学校を経て、東京帝国大学の西洋史学科を卒業し、1909 年に京都帝国大学に就職し、文学部史学科に日本初の考古学研究室を作るため、1913 年から３年間にわたってヨーロッパに留学し、イギリスでは、ペトリーから多くを学んだ。浜田が帰国後に授業用のノートを基に出版した『通論考古学』（1922 年）は、考古学の日本最初の概説書としてロングセラーとなった名著だが、発掘調査に関する部分は、ペトリーの『考古学の方法と目的』（1904 年）に依拠している。浜田自身は、ペトリーの指揮する発掘現場の泥にまみれることはなく、浜田の弟子だった梅原末治も、ヨーロッパの洋行に際して、浜田の紹介でペトリーの知遇を得て、パレスチナのジェメー遺跡の発掘調査現場を訪ね、組織的な発掘調査の方法に感心したと書き記している。

このようにみると、日本における近代考古学の黎明期（大正年間から昭和初め頃）には、書物だけからではなく、考古学者が洋行をして、イギリスやヨーロッパの最先端の学者に直接教えを請い、その成果が持ち帰られていたことがわかる。これに対して、第二次世界大戦の前後の頃になると、ウィラーやチャイルドに直接学んだ日本人の考古学研究者の姿はなく、イギリスやヨーロッパの考古学の知識は、もっぱら書物を通して伝えられていたように思われる。UCL の考古学研究所にも日本人を含む世界中の学生が溢れる今の時代、隔世の感があると言わざるを得ない。